

『学校建物の耐力度測定方法〈第二次改訂版〉』において、記載事項に誤りがございました。  
 お客様には、ご迷惑をおかけいたしまして誠に申し訳ございません。  
 謹んでお詫び申し上げますとともに、次のとおり訂正いたします。

### I 既存鉄筋コンクリート造（青色の表紙）

訂正箇所		誤	正
書籍頁数	項目・行数		
51 頁	表3「グレード0.5」の「躯体の状態」1行目	・幅 0.3mm <u>未満</u> のひび割れが	・幅 0.3mm <u>以上</u> のひび割れが
116 頁	調査票 Ⅲ結果点数	④構造耐力 <u>69</u> 点 耐力度(A×B×C) <u>4281</u> 点	④構造耐力 <u>62</u> 点 耐力度(A×B×C) <u>3846</u> 点
116 頁	調査票 ③基礎構造β	$1.0 \times 1.0 = 1.0$ <input type="checkbox"/> 地中梁による低減 <sup>註)</sup> 評点 $\textcircled{E}$ <u>1.0</u> $\textcircled{D}(\textcircled{E} \times 30)$ <u>30.0</u> 点	$1.0 \times 1.0 \times 0.75 = 0.75$ <input checked="" type="checkbox"/> 地中梁による低減 <sup>註)</sup> 評点 $\textcircled{E}$ <u>0.75</u> $\textcircled{D}(\textcircled{E} \times 30)$ <u>22.5</u> 点
116 頁	調査票 ④構造耐力	評点合計 $\ominus$ <u>69.0</u> 点 ④ <u>69</u> 点	評点合計 $\ominus$ <u>61.5</u> 点 ④ <u>62</u> 点
152 頁	下から7行目	$\theta = \dots = \underline{114.74}^\circ$	$\theta = \dots = \underline{103.27}^\circ$
152 頁	下から5行目	$= 0.5 \times \left( 2\pi - \frac{114.74}{180} \times \pi + \sin 114.74 \right) \times 145^2 = 54525$	$= 0.5 \times \left( 2\pi - \frac{103.27}{180} \times \pi + \sin 103.27 \right) \times 145^2 = \underline{57312}$

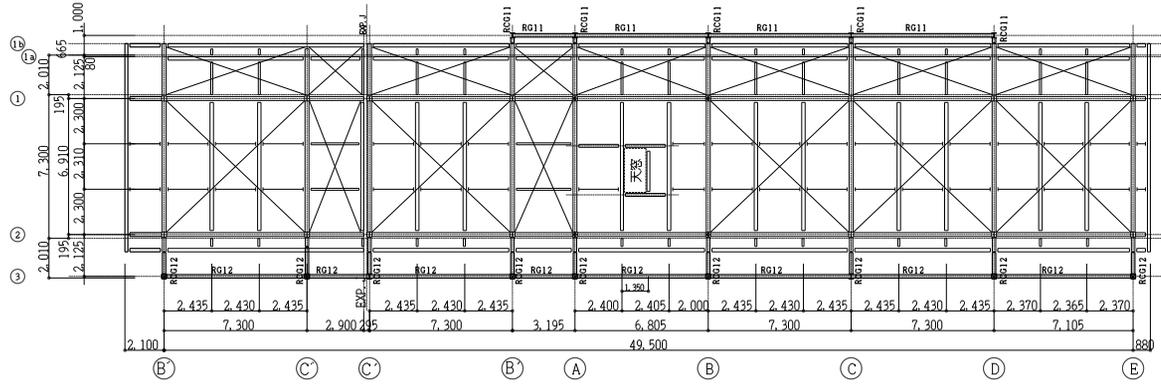
152 頁	下から 2 行目	$Q_f = \dots = \dots \times 54525 \times 10^{-3} = 283.6$	$Q_f = \dots = \dots \times 57312 \times 10^{-3} = 298.1$
153 頁	上から 2 行目	$q_1 \alpha = \dots = 283.6 / (1.2 \times 130.0) = 1.82$	$q_1 \alpha = \dots = 298.1 / (1.2 \times 130.0) = 1.91$
156 頁	下から 1 行目	以上から、地震被害に関する指標は $\beta = u \times p = 1.0 \times 1.0 = 1.0$ となる。	地震被害に関する指標は、キール梁を受ける妻面柱に地中梁がないこと、張間方向は地中梁 FB が配置されているが地震時の曲げ抵抗としては期待できないので、一方向の地中梁と判断し、 $\beta$ 算定式の右辺に 0.75 を乗じて評価する。 $\beta = u \times p \times 0.75 = 1.0 \times 1.0 \times 0.75 = 0.75$ となる。
157 頁	上から 4 行目	よって、評点は $1.0 \times 30 = 30$ 点	よって、評点は $0.75 \times 30 = 22.5$ 点
157 頁	上から 9 行目	$\textcircled{A} = (29.0 + 10.0 + 30.0) \times 1.0 = 69$ 点	$\textcircled{A} = (29.0 + 10.0 + 22.5) \times 1.0 = 61.5 \rightarrow 62$ 点
162 頁	下から 2 行目	耐力度 = $69 \times 66 \times 0.94 = 4281$ 点	耐力度 = $62 \times 66 \times 0.94 = 3846$ 点

## II 既存鉄骨造（ピンク色の表紙）

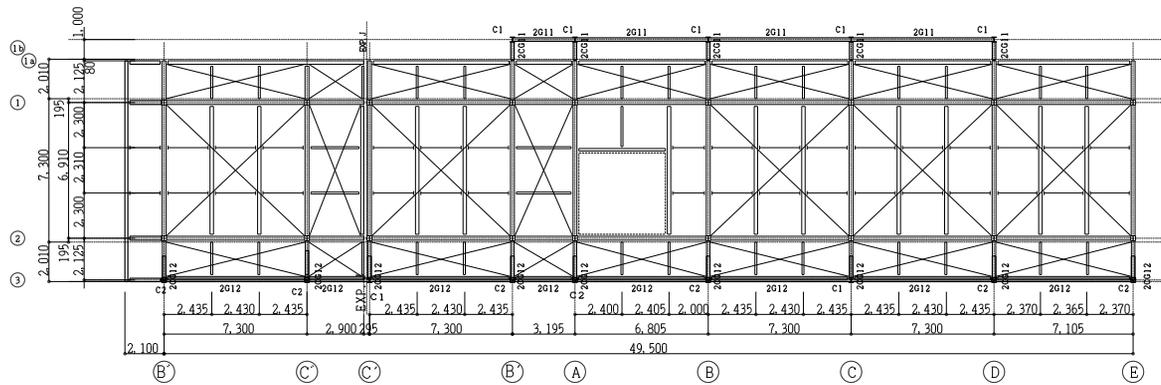
訂正箇所		誤	正
頁	項目・行数		
22 頁・50 頁	上から 5 行目 下から 3 行目	被災歴が無い…被災度区分判定で軽微に区分される場合	被災歴が無い…被災度区分判定（日本建築防災協会「震災建築物の被災度区分判定基準および復旧技術指針」による、以下同様）で軽微に区分される場合
47 頁	上から 12 行目の判別式	$\theta \leq 1/120 \dots 1.0$	$\theta \leq 1/200 \dots 1.0$
74 頁	上から 4 行目	… 8 <u>ス</u> ン	… 8 <u>ス</u> パン

R 階伏図  
2 階伏図

【「正」のみ記載】

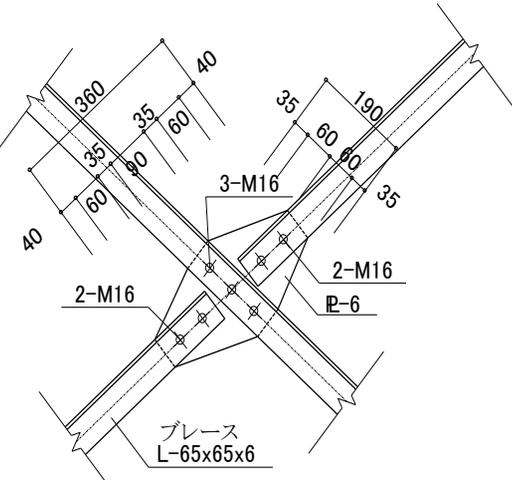


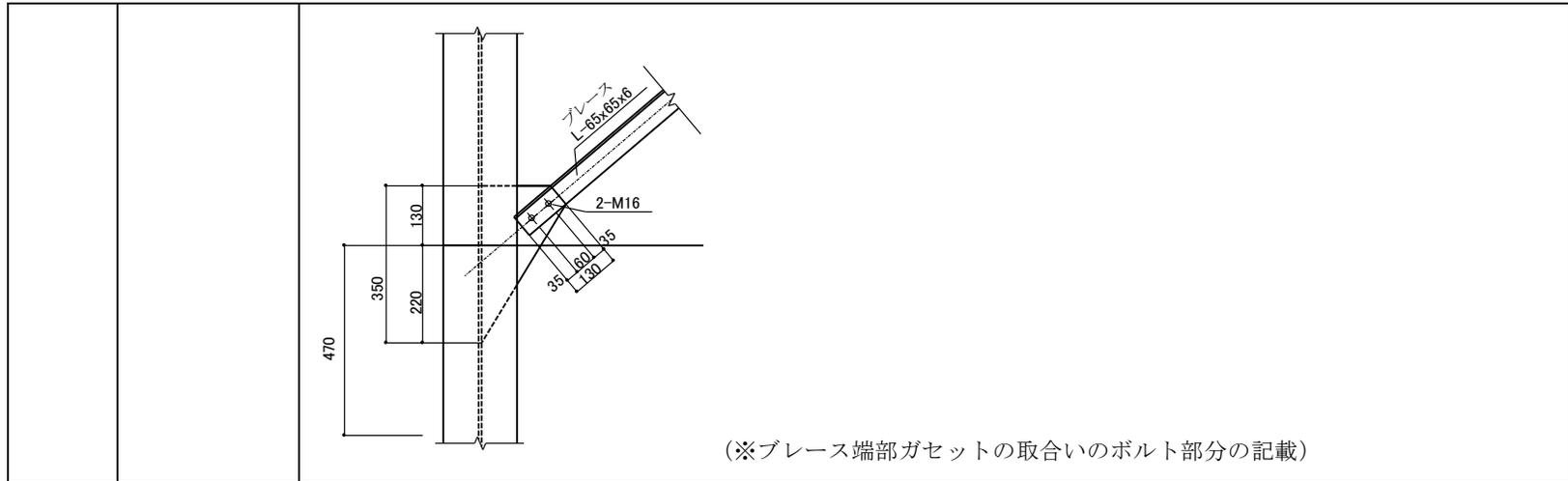
R階伏図



2階伏図

(※図 4、上 2 つの図につき、通り名の誤り)

81 頁	「(1) 張間方向(短辺方向)」の表「方向」	方 向 : X (L→R)	方 向 : Y (L→R)								
88 頁	調査票中 「Ⅱ 調査建物」の「面積」	<table border="1" data-bbox="627 299 836 456"> <tr><td>一階面積</td></tr> <tr><td><u>1,826</u> m<sup>2</sup></td></tr> <tr><td>延べ面積</td></tr> <tr><td><u>2,177</u> m<sup>2</sup></td></tr> </table>	一階面積	<u>1,826</u> m <sup>2</sup>	延べ面積	<u>2,177</u> m <sup>2</sup>	<table border="1" data-bbox="1284 299 1493 456"> <tr><td>一階面積</td></tr> <tr><td><u>625.1</u> m<sup>2</sup></td></tr> <tr><td>延べ面積</td></tr> <tr><td><u>704.4</u> m<sup>2</sup></td></tr> </table>	一階面積	<u>625.1</u> m <sup>2</sup>	延べ面積	<u>704.4</u> m <sup>2</sup>
一階面積											
<u>1,826</u> m <sup>2</sup>											
延べ面積											
<u>2,177</u> m <sup>2</sup>											
一階面積											
<u>625.1</u> m <sup>2</sup>											
延べ面積											
<u>704.4</u> m <sup>2</sup>											
99 頁	図 8 のうち、 上から 2 番目、 3 番目の図	<p data-bbox="454 477 653 500">【「正」のみ記載】</p>  <p data-bbox="981 998 1576 1026">(*ブレース交点のボルトにつき、2-M16 → 3-M16)</p>									



### Ⅲ 既存木造（緑色の表紙）

訂正箇所		誤	正
頁	項目・行数		
18 頁・ 47 頁	下から 10 行目 上から 2 行目	相対沈下量の最大値 $\phi_f$ により	相対沈下量の最大値を元に算出した沈下率 $\phi_f$ により
33 頁	上から 3 行目	低減係数を求めた。	低減係数を求めた。 <u>1/4 未満となる場合の低減係数は 0.6 を 0.5 に低減している。</u>
44 頁	上から 15 行目	外壁土台、外壁柱、 <u>2 階床梁</u> 、小屋梁	外壁土台、外壁柱、 <u>床梁</u> 、小屋梁

#### IV 既存補強コンクリートブロック造（紫色の表紙）

訂正箇所		誤	正
頁	項目・行数		
55 頁	図 3 の下、上から 1 行目	<u>建築基準法施行令</u> には耐力壁のかぶり厚さは…	<u>日本建築学会補強コンクリートブロック造設計基準 (2006)</u> には耐力壁のかぶり厚さは…

以上